

■ 第二話 夢見ているか

■ 1

その男の手には指が六本あった。タツちゃんは、見まちがいかと思つて何度も確かめたんだから間違いない。六本指で酒を入れたコップを持つていた。男はタツちゃんの視線に気づいたのか、タツちゃんの顔を見ると急に立ち上がり、タツちゃんのテーブルへと近寄つてきた。やばい。何かいちゃもんでもつけられるのか？

「やあ、タツちゃんやんか、久しぶり。なにしてるの、こんなところで。」

と、あろう事か六本指の男はタツちゃん名前を呼んだ。

”え？ なんで？ ここ、大阪だよ？ はじめて来たんだよ？ それに、僕は六本指の友人の顔を忘れる程、ウスラバカでハクジョーな人間ではないはずだけど…”

「忘れたんかいな。ワシやワシ。宙公や！」

「ーチユウコウ？ どこかで聞いたような…。あ！思い出した。」

☆ ☆ ☆

話は順を追つて成さなければならぬ。ちようど一年前。タツちゃん宇宙人と知り合った。九州にある来栖産業大学、学生のためのホアパトで、彼はタツちゃんを新人類になる可能性ありとみて、精神ワープを試みた。しかし、今のところタツちゃんはまだ人間のままだ。

「あれから星に帰ってんけど、えらい上司に怒られてなア。『アホンダレ！ 上位レベルの新人類は地球に絶対おると、調査でわかっとなじや。もっぺん探しなおしてこい！』とか言われて、もうボロかすや。そんでまた地球に来て、北から順ぐりに回つて来て今で四ヶ月目。もう、二三十人に新人類ワープ試したけど、全部ボツやったわ。」

と、宙公は、それはもう情けない顔でコップの酒をあおった。タツちゃんは飽かずにその横顔をながめていた。

「なんや、そんなにワシの顔が懐かしいんか。」

「いや、全然懐かしくない。」

「なんや。そんなら、なんでそんなにじつと見てんねん。」

「お前、いつから地球人と同じ顔になったんだ？」

宇宙人の顔は、どうみても地球人の顔だった。前に雪を降らせてく

れた時にはどう見ても宇宙人としか見えなかったと言うのに。  
 「あれ？ ワシの顔が地球人に見えるんか？」と、宇宙人は大きなため息をつくと、

「：そうか。」と、少し残念そうな顔をして、店の赤ら顔の主人に  
 コップ酒のお代わりを頼んだ。

「タツちゃん、しばらくこの街におるんか？ よっしや。そしたら、  
 また会おう。そんな時にでも話したるわ。」

■  
2

都会の朝というのは、なんと忙しいのだろう。電車がひっきりなし  
 に行ったり来たりするし、その電車から吐き出される人間の数と来た  
 ら：。タツちゃんは、小学校のころ夏の北海道の野原で蝶の死骸に群  
 がっていた蟻を思い出して少し気分が悪くなった。

「ゴメンとね。遅うなって悪かったとヨ。こげん人が多いっちゃ思  
 わにやあでいたんずら。」

と、懐かしい来産語――来栖産業大学特有方言ごちやませ語――が  
 響いて来た。海洋生物研究会の紅一点、桜川ルイちゃんである。

「いいよいいよ。」

と、タツちゃんは思わず微笑み返してしまった。なにセルイちゃん  
 は美人で可愛いのである。

「悪かったね。こんなに朝早くに待ち合わせて。あたし、ラツシュ・  
 アワ―の事、すっかり忘れてたわ。」

ルイちゃんは来産語を使わずに話し出した。マジな話を始める時、  
 標準語になつてしまふのが彼女のクセだ。

「実は朝早くでないよ、ちよつとまずいのよね。まだまだ暑いから。」

「じゃ、まだイルカは港にいるの？」  
 「ウン。」

☆ ☆ ☆

やはり、話は順を追って成さなければならぬ。この夏のことであ  
 る。郷里の北海道へも帰らず、タツちゃんは来産大で夏休みを過ぎ  
 た。ルイちゃんと知り合ったからである。そして彼女はイルカ・シ  
 ョーのアルバイトのため、九州に居残つたからである。要するに、  
 タツちゃんは彼女に惚れていたわけだ。

その彼女が夏も終わるころ、タツちゃんに泣きついてきた。イルカ  
 が一頭逃げたというのだ。別に彼女はエサを包丁で捌くのが仕事だつ  
 たのだから責任はないのだけれど、その後と言った言葉が不可解きわ

まるものであった。

「リヒテンシュタインは大阪へ行つたとよ。」

話は：、順を追って話してもらわないと、わからない。ルイちゃんの話をもとめれば、「リヒテンシュタイン」というのは、イルカの名前であるらしい。しかし、イルカが何故、大阪くんだりまで出かけねばならないのか。

しかも、その逃げたイルカが大阪にいと、何故、彼女に分かるのか？ 不可解ではあったけれど、少なからず彼女に好意を寄せるタツちゃんとしては、不可解なりに信じざるを得なかった。

そして九月になって、大学からプイと姿を消したルイちゃんから、タツちゃんに連絡があつたのが三日前。いま、大阪にいる、大阪港にはリヒテンシュタインもいるという一通の手紙だった。

どうやら、タツちゃんは助けを求められている。あわてて、タツちゃんは大阪へ飛んだ。

「一日三回、シヨがあるでっしゅう。その一時間前から、もう、地獄とネ。イルカはバケツに一杯イワシばア食いよる。七頭おるけん七杯ね。七頭そろってレインボー・ドルフィンたらゆうて、見映は良かつけども、大勢の客がちよなんとおひなさまみてエに並ばされとう、その前で、みんなエサア欲しさにジャンプしてるかと思つて泣けてくるんよ。次から次に客が入れ替わっても同じ事させられるし、そのくせエサもらえるつつうて喜んどるし：。そのエサっちゃあ冷凍のマズカイワシやもんね。冷凍庫はスゴきやあも。おそろしいとこだつちや。魚の死体が人間様の手できれいに並べられとんやもんねエ。気持ち悪かこつ、たまらんちや。あー、つるかめつるかめ。」

地下鉄のギウギウ詰めの中でルイちゃんは興奮しながらしゃべった。

「あげな狂うた生活してたら、リヒテンシュタインもおかしゆうなるでヨ。」

「タツちゃん、実はね。アタシ：。」

出た！標準語アクセントだ。この夏は、この標準語のあとで、「お金ないの。三万円貸してくれる？」とタツちゃんは泣きつかれた。そして、そのお金を握って、彼女は大阪に消えたのだ。

「アタシ：。どうやらイルカと話せるらしいの。」

### ■ 3

ホテルの部屋というのは、冷たいベッド、の一言で、すべてを言い表していると思う。天井だって、そうじが行き届いているだけに人のぬくもりが感じられない。

——こんなところでこんな事をしていていいのだろうか？ もうテストも終わるころだ。これで八単位は落としたことになる。  
ルイちゃんと一日大阪港を走り回った疲れが体を動かなくさせていた。

どこを探してもリヒテンシュタインはいなかった。

——いない方がいいのかも知れないなア。

タツちゃんはベッドに寝ころがったまま、タバコをくわえて火をつけた。本当はベッドでタバコを吸っちゃいけないと、部屋に備え付けのフাইルに書かれてあったんだけど……。

ルイちゃんに話した言葉がよみがえってくる。

——イルカ：リヒテンシュタインは、広い海へ帰りたかったんだらう。

——そうじゃないの。あたしは、はっきり聞いたの。リヒテンは大阪へ行くって、そう言ったの。

——だけど、ここにはいないよ。こんなところで暮らせやしないよ。重油の浮いたこんな海じゃ。

——うん。リヒテンはいる。ここにきつといる。アタシの呼び方が悪いのよ。リヒテンに分かってもらおうとしてないのよ。きつとアラシさんなら……。

そしてルイちゃんは、とつとつと話し出した。イルカを呼ぶ笛のこゝと。リヒテンと一番仲の良かった「アラシ」さんが、イルカたちの目を見つめて体全体でサインを出すこと。ルイちゃんが出したサインがことごとく失敗したこと。「アラシ」さんの黒い目がイルカに似てると言うこと。ルイちゃんはイルカの目が好きだということ。だからイルカが好きだと言うこと。そして「アラシ」さんが、和歌山の太地でクジラを調教するために大阪に出てきていると言うこと。

そしてタツちゃんは、気付いてしまった。ルイちゃんにとつと大切なのは、もしかしたらイルカではなくて「アラシ」さんなのかも知れないという可能性に。

そして、タツちゃんは信じられなくなった。ルイちゃんが大阪に出てきた理由も、イルカが大阪に来ようとしているという、ルイちゃん的主張も。

タツちゃんはやるせなくなつて窓の方を見た。星空が見たくなったのだ。でもビジネスホテルの5Fから見える空なんて、向こうのビルの上にほんの少しだ。来産大近くの下宿から見える、あのちりばめたような星空が見たくなった。一年前宙公と一緒に見た大宇宙の星の中にひたりたくなつた。急に宙公と会いたくなつた。

と、その時、窓の外ににゅうつと人の顔があらわれた。

「宙公！」

やけ酒だった。

「だいたい地球はおかしいんよ。全体で五十七メガリも反応がある。わかるかタツちゃん。これはものすごい反応が高いねんで。そしたらな、新人類が出現せなウソやねんで。そやからこそ上位レベルの生命体探してるんや。今、銀河系は危機やねんで。いま救世主となるべく上位生命体が生まれへんかったら、銀河系の腕はどんどん伸びて、伸びきってしまうど。腕が伸びたら大変な事になるんや。大事な時やねや。そやのに何や。ニューヨークでもパリでもロンドンでもモスクワでも東京でも、人間がおるとどここもかしこも三十七メガリとか三十五メガリとか。ウソやろ、え？ やりがいのある仕事やと思てたのに、なんでやねん。なんでわしがこんなアホみたいにわけのわからん妙な仕事せなならんねん。全体で五十七やぞ！なんで局部局部が、それも人口密度の高い場所に限ってこんなに個体反応度が低いねん。ガツーンと一発くらわさなわからんねや！」

宙公は大声で叫んだ。目がすわっている。ホテルの人に聞こえたらまずい。ここはシングル・ルームなのだ。

「ぼやくなよ。そういう事だつてあるさ。世の中そううまく行くもんじゃないよ。」

「そら、その言い草や。タツちゃん。タツちゃんの個体反応度も、去年に比べたらえら低や。去年はほんまに新人類になれる可能性を持ってたのに、今年はこれや。もうあかん。銀河の終わりも近い。去年のタツちゃんもつと、こう、逆境に立ち向かうような精神エネルギーがあつたやないか。」

「うるさいなア。今日は落ち込んでんの。」  
「ルイちゃんやろ。あの娘は個体反応度高いぞ。まだ新人類になる可能性までは行ってないけどな。」

僕は少し気を取り直して、気になっていた事を宙公に聞いてみた。

「彼女……。ほんとにイルカ言葉が解るんだろうか？」

「んー……。わかるんちゃうか？ イルカっちゃうのは、ものすごく頭ええねんぞ。これは単なる仮説やけどな。人類もとはイルカみたいな水棲の生物やつたんやないかちゆう話もあるしな。」

「ふーん。」

タツちゃんはなんだか少し淋しい気持ちになった。彼女にイルカ言葉が解るとすれば、リヒテンシュタインは、やっぱりこの大阪にいて、油にまみれて大阪港で過ごしていることになるのだ。海に帰りもしないリヒテンは、もしかしたらアラシさんを追いかけて大阪までやってきたのかも知れない。それなら、ルイちゃんを追いかけてここまで来た僕と同じだ。

タツちゃんはそう思って、急に酔いがさめてきてしまった。  
氷がグラスの中でカランと音を立てた。  
「宙公、飲み直しだ！」

■ 5

大阪湾の片隅で、若い女が海に向かって座っていた。オレンジ色のTシャツで海風を受けながら、彼女はつぶやいていた。

「イルカいないか、いないかイルカ。」

その横顔は少し寂しげだった。

「いつならいるか？」とつぶやくと、彼女は海に向かって小石を投げた。

「いっぱいいるか？ ゆめみているか。」と、彼女はため息をついた。

■ 6

「宙公。完全に大阪弁になっちゃったなア。」

昨夜の飲み屋に河岸を変えて、タツちゃんと宙公は飲み直ししていた。

「そうか？ そうかな…。まぼろしのせいやな。きつと。」

「マボロシ？」

「そう。ワシもこの土地に長い間居すぎたんやなア。都会は怖い。逆催眠にかかってまうからな。」

「サイミン？」

「そう。あたりのもんに気付かれんように集団催眠バリヤ張ってんねん。」

「バリヤ？」

「そう。ワシの姿のことやがな。」

「ああ！」

タツちゃんはやっと宇宙人が宇宙人に見えない事に納得した。

「しやけど、タツちゃんまでワシを人間に見るなんてな。」

「何か変か？」

「おかしい！ タツちゃんの個体反応度やったら、見抜けるはずや。ようワシの顔見イ。ワシは人間の顔してるけど人間やない。大阪弁しやべってるけど、大阪弁やない。注意深く観察して、自分の心にじっくりと聞いたら解るはずや…。」

宇宙人は真剣な顔つきで僕を見た。

「どうや、変わって見えてきたか？」

「全然。」

「あかん。タツちゃん、こんなところ、長い間おったらあかんで。街の個体反応度の低さが伝染してるんや。」

「よっしゃ。明日、残りの仕事片付けたら、この街、出るさかい、タツちゃんも一緒に出て行き。港で待ってる。明日の夜九時のフェリーや。そんな時にタツちゃんにエエモンあげるわ。よし、決めた。」

「そんな、いいよ。僕はまだやることあるんだから。」

「目エ覚ますのは早い方がエエ。：マボロシの怖さ知ったら、よう解るはずや。見ときや。」

「そう言うとうと宙公はスツと立ち上がった。」

「おっちゃんおかんじよう。」

「ハイハイ。エート、何と何でしたかいなア。」

宙公は二人で飲み食いしたものをひとつひとつ数え、赤ら顔の主人に値段を確かめていた。

「えーと、焼き鳥は一皿いくら？」

「二百五十円です。」

「イチ・ニ・サン・四皿で千円ツと。」

と宙公は千円を越えるたびに、店の主人の方に手を向けて、千円を越えるごとに、その指を一本ずつ曲げた。

「イチ・ニ・サン・シ」と四皿数えては、指を折る。

「えーと、こんだけやね。」

と、宙公が主あんどの方に差し出した六本指の手には、何指だかは知らないけれど、折られていない指が二本高々と立っていた。

その残った二本指を見て、主は、

「あつ全部で三千円ですな。ハイハイ。」

と、素直に答えた。

赤ら顔の主人は、何も気づかない。五本指から二本を引けば三本になるのは常識だろうけれど、宇宙人が酒を飲むのは非常識なのだ。

三千円払って外へ出る。笑いかみ殺して宇宙人が目配せをする。

タツちゃんも笑いかみ殺してそれに応える。

タツちゃんたちは後をも見ずに一目散、照明看板の路地裏目指して走り出した。大笑いが響き渡った。

笑いをこらえて宙公が言った。

「なっ。怖いやろ。」

タツちゃんは何も答えなかった。

もちろん、笑うのに忙しかったからだ。

■  
7

ルイちゃんに連絡用に書いてもらった電話番号を調べて風明荘とい

うアパートにたどりついた。

タツちゃんは、今晚自分のアパートに帰る事に決めた。だから、一目でいいからルイちゃんの顔が見たくなくなったのだ。電話では、声ばかり聞こえてマボロシと話しているみたいで、会って話があったのだ。

”僕は受話器と話したいんじゃないよ。”と、タツちゃんは思っていた。

そこは、タツちゃんのアパートにも負けないボロアパートだった。廊下に三輪車がゴミバケツに隠れるように置いてある。住所はわかっても、部屋まではわからない。タツちゃんはゆっくりと廊下を歩いていった。

一部屋、立て付けが悪いのか、ドアが突然音もなく、ほんの少しだけ開いた。三十cmほどの隙間から部屋の中が見えた。見覚えのあるオレンジのTシャツと洗いざらしのいい色をしたフレンチジーンズの後ろ姿が見えた。そして、そのTシャツの下を、男の手が這っていた。艶っぽい場面のような。でも、それはとても当たり前前の自然な風景だった。

二人は、タツちゃんには気づいていないようだ。タツちゃんがヒョイとドアの上を見ると、紙で作った表札に「嵐 徹次」と、ぶっきらぼうな字で書かれていた。タツちゃんは音を立てぬように気遣いながら、アパートの外に出た。

タツちゃんは、ちゃんと話そうとして、みごとに失恋したというわけだ。

アパート前の通りには、ちよつとばかり、風が、秋の匂いを運んでいた。

■ 8

結局、リヒテンシュタインは現れなかった。もう夜の九時。ルイちゃんの言葉によれば、夕方、陽が沈む前に、いつも決まった場所ジャンプするんだそうだ。でも目印のオレンジのブイのまわりには、誰かが捨てたパンの袋が浮いているだけだった。

「だいぶ待ったみたいやね。」

宙公の声がした。ふりむくと地球人の顔をした宇宙人が立っていた。

「うん。あつ、いや、宙公が遅れたって訳じゃないよ。」

「わかってる。リヒテンの事やる？」

「うん。でも半分はルイちゃんを待ってたのかも知れない。」

「かもね。」

宙公は苦笑いで相づちを打った。

夜の海はタポンタポンという音だけが潮風にまぎれて聞こえてくる。今日は月が弓なりに光っていて、波の上にもいくつもの弓形が現れては消え、消えては現れた。

「でも僕は、誰とも待ち合わせていないんだもの、仕方ないよ。」

「：そういう事や。タツちゃんにもワシにも必要な人は、ありのままに戻ってやり直すことやろな。ほら『ええもん』。」

と宙公が差し出した六本指の手のひらには緑に光るまんまるの葉が乗っていた。

☆ ☆ ☆

あたり一面、電気仕掛けのコンペイトウだらけだった。頭の上も足の下も、目の前にも右にも左にも。見渡す限り、ずっと遠くまで満点の星でいっぱいだった。タツちゃんは宇宙のまん中に立っていた。

たぶん後ろ側も光る星でいっぱいなんだろうと思つてタツちゃんは振り向いた。でも、そこには街が浮かんでいた。ビルがいっぱい並んだ大都会だった。東京のような気もするし、ニューヨークのような気もした。遠くに浮かぶその街を、じつと眺めていると、中から何かが飛び出して来た。ミサイルみたいな形でまっすぐにタツちゃんの方へとやってくる。いくつも、いくつも。

でもそれは、ミサイルではなかった。イルカの大群だ。タツちゃんのところまで、まっすぐやってきて、タツちゃんの事も気にもとめずにそのまま、まっすぐに行き過ぎていく。何頭も、何頭も、何万頭も。やってきては行き過ぎていく。

イルカたちの突き進む方向に大海原があつた。水平線が見える。タツちゃんあたりを見回した。そこにはもう、イルカ達だけの世界はなかった。ありとあらゆる魚が、魚という魚が大宇宙を泳いでいた。足の下をくぐり抜け、タツちゃんの体を左右にすり抜け、頭の上を飛び越して。みんな海の方へと向かっているのだ。

見事な光景だった。輝く星のまたたきが魚達のうろこに反射して、輝きが倍になったようだ。その輝きの中をドルフィンキック達が走り抜けていく。

——ああ、これがいちばん素直な姿なんだ。波の下にはこんな宇宙があるはずなんだ。

などとタツちゃんは妙にマジメな気持ちになった。

「そうだ、僕もいっしょに泳げばいいんだ」とタツちゃんが思った時、冷たい潮風が頬をなでた。

冷たい潮風が、頬をなでた。

タツちゃんが目を覚ましたのは、フェリーの甲板だ。デッキチェアで眠りこけていたらしい。宙公は見あたらない。

「――また星へ帰ったのかな？ 結局宙公の宙公としての顔を見られなかったよなあ。」

と、タツちゃんはそんなことを残念に思った。

ふと光がタツちゃんを目をよぎる。港の入り口を示す光だった。もう少しでこの船も外海に出る。タツちゃんはデッキを歩いて最後部へ、船の残す白い軌跡をながめに行った。

大阪の街はまだ、タツちゃんの視界より大きく、すべてを見る事は出来ない。けれど、それでも、その景色は、徐々に小さくなって行くだろう。今に小さな光の一点となってかき消えてしまう。

ゆらゆらゆれて、ゆっくり進む船の速度はタツちゃんの気持ちに似合ってるみたいだ。

遠くなつて行く街明かりの中で、その時タツちゃんははつきりと見た。一頭のイルカがその油まみれの体を月の光にぬめらせて、波の間から高く高く跳びはねるのを

「――やっぱりいたのか、リヒテン！」

その時はじめてタツちゃんは、リヒテンの気持ち解った。なぜ波の下から飛びあがってきたのかを。

「――そうさ、大阪港は、なんて、なんて大きな舞台なんだろう。「アラシ」さんだっているんじゃないか！ 来栖の田舎の水族館のステージとは全然違う。」

でもタツちゃんにはリヒテンが可哀想でならなかった。いったい誰が信じるのだろうか？ こんな汚い海にイルカがいるなんて。あんな街のいったい誰が？ リヒテンのジャンプに気づいてやれるだろうか？

☆ ☆ ☆

せめて、バジャンというジャンプの音が、リヒテンの姿が波の下に消えてしまうより先に、誰もものに届けばいいのに。

素顔の宙公の苦笑いが見えるような気がした。